

# 序

## シンポジウム・ワークショップ・展示の趣旨と成果概要

サブプロジェクト「装飾芸術の世界性」代表  
立命館大学文学部教授 鶴岡真弓

### 1. はじめに

日中国際シンポジウム「《中国の伝統・民間剪紙芸術》と日本「装飾」のシンボリズム——装飾文化生成の原点を「世界を切り取る技」から読み解く——」は、立命館大学 21 世紀 C O E 「京都創生アート・エンタテインメント」プロジェクト、サブプロジェクト「装飾芸術の世界性」（代表・立命館大学文学部教授・鶴岡真弓）活動として、中国側と日本側から参加された以下の専門家の方々とともに準備を重ね、2005 年 11 月 17 日（14：40－17：50）、本学立命館大学アトリサーチセンター多目的ホールにおいておこなわれた。

このシンポジウムの特色は、今回の企画者・講演者・実演者・パネラーの各専門家が、現地中国において数年来すでに進めてきた民俗芸術や先史美術考古のフィールドワークを軸とする、日中の国際共同研究と交流の蓄積をもとに、可能となったものであることである。

中国側から、北京中央美術学院名誉教授で、中国民間剪紙研究会・会長であり、著名な『中国生命の樹』の著者である靳之林（ジン・ツーリン）教授を、基調講演者およびパネラーとしてお招きし、また特別に、剪紙芸術技能者・作家の靳文香氏と靳山菊氏を実演者としてお願いした。

そして日本側からは、靳之林教授と中国東北部の先史考古美術や民間芸術を調査してこられ、縄文土器文様など先史形象・民俗芸術研究者の島亨氏、日中民間芸術交流コーディネーターで靳教授の『中国生命の樹』の編集を島亨氏とともに手がけた、五十嵐芳子氏を招き、「剪紙芸術」を本格的に紹介した本邦初の日中国際シンポジウムとなったことである。まず、当日のプログラムはつぎのとおりである。

#### プログラム

##### ●基調講演

「生成～中国民間剪紙の表現、生成の文法」

靳之林（ジン・ツーリン）（中国・中央美術学院名誉教授・中国民間剪紙研究会会長）

通訳・于坤（ウ・コン）（本学文学研究科修士課程）

##### ●コメント

「中国剪紙と京都伝統意匠の装飾表現面とフィギュール」

鶴岡真弓（立命館大学文学部教授、装飾美術）

##### ●シンポジウム・討議

「中国と日本における生活の芸術と装飾空間—身体の生成・異化」

[司会] 鶴岡真弓

[パネラー]

靳之林

島亨（先史造形・民俗芸術研究者・言叢社・社主）

五十嵐芳子（日中民間芸術交流コーディネーター・編集者）

通訳・于坤（ウ・コン）

##### ●剪紙の展示と実演

靳文香（剪纸技能保持者 作者）、靳山菊（補佐）

このシンポジウムはテーマである中国の民間芸術「剪纸」のワークショップを、聴講者の方々の参加によって実現したこと、またシンポジウム会場で同時にオリジナルの「剪纸」作品を展示し、ともにみずからの「手」で作り上げる困難と喜びを共有した。それは身体にハンディのある方々にも、「剪纸」を思考と表現のきっかけとして、最も身近な「剪る」という創造をおこなっていただく契機となることを呼びかけることができた。

その意味でこのシンポジウムは、本報告書で後述されるように靳之林教授とパネラーの専門家の方々の尽力によって、靳教授が来日中に参加された他の研究会やシンポジウム、とくに身障者の方々にアートを通じて創造を共有していただく、奈良「たんぼぼの家」でのワークショップなどと響きあい、総合的成果を日中で構築する研究活動として結実したものであることを特記したい。

## 2. 靳之林教授の民間芸術研究と「剪纸」芸術

そもそも「中国民間剪纸（せんし）芸術」は、わが国ではこれまで、本格的に専門家の研究成果として紹介されることがなかったが、中国の民間芸術として最も重要な領域のひとつで、古来、中国文化圏とそれを取り巻く諸文明の民間に伝わる「剪纸（せんし）」の芸術、すなわち祭礼や節句など、人々の生の節目に身体や建築に飾られてきた、「剪（き）り紙」の芸術のことである。

この民間芸術に中国で初めて正面から光を当てたのが、このたびシンポジウムにお招きした靳先生である。1980年にはパリで「延安地区民間剪纸展」「延安地区農民画展」を開催されるなど、世界に向けて中国民間美術をはじめて紹介した、世界的に著名な中国民間芸術の研究者にして画家である。

靳之林先生は、1928年、河北省欒南県生まれ。中央美術学院で、呉作人、徐悲鴻、齊白石などに師事し、1951年に卒業。同学院油彩系の董希文工作室を経て、吉林省芸術学院美術系で教務をとられた。1973年、文化大革命によって革命の根拠地・陝西省延安に下放され、陝北の農村に入り、民間美術（民間剪纸・農民画・民間壁画・民間麵花など）の調査・研究にたずさわり、延安地区群集芸術館美術組長、文物管理委員会副主任、延安地区文物局長などを歴任。1979年、はじめて北京・中国美術館で民間美術の価値を紹介する展覧会を開催。翌80年にはパリで「延安地区民間剪纸展」「延安地区農民画展」を開催、世界に向けて中国民間美術をはじめて紹介した。パリでの中国民間芸術の紹介は、1984年の皮影戲（影絵芝居）と民間花火、1994年の「中国民間美術展」など、度重ねておこなわれ、油彩画の個展もたびたび催されている。ミッテランフランス国大統領よりその功績にたいして「金十字勲章」が授与された。

延安時代の最後の頃に、咸陽から内蒙古陰山にいたる「秦の直道」をはじめて徒歩で踏査してその全行程を明らかにし、世界に報道された。また、その間にある数百か所におよぶ仏教・道教石窟芸術を発見。1986年、延安から陝西省の省都・西安に出て中国美術家協会陝西分会副主席に就任したが、民間美術の発掘、調査とその価値を世界に紹介した業績が評価され、同年、母校の中央美術学院に招聘され、民間美術系民間美術研究室が創設されて同研究室主任教授に就任された。

現在、中央美術学院名誉教授。中国民間剪纸研究会会長。中華人民共和国文化部芸術（美術）専門人員高級職務評審委員会委員、国家教委中小学教材審定委員会（美術）学科審査委員、などの要職も歴任されている。主な著作に、『生命之樹』[邦訳、『中国の生命の樹』言叢社]、『抓髻娃娃—与人類群體的原始觀念』、『綿綿瓜瓞—与中国本原哲學的誕生』などがある。『自然と文化』など、日本の雑誌にも寄稿、邦訳されている。

また靳文香氏（Jin Wenxiang ジン・ウェンシャン）氏は靳之林夫人で、靳之林氏にしたがって陝西省延安に赴き、黄土高原農村の母親・子伝承の民間芸術である剪纸の技術を学び、娘の靳山菊さんとともに、有数の剪纸作家である。山菊さんは、フランス国立映像音響芸術学院に留学、目下「剪纸」芸術を生かしたアニメーション作家を志している。

日本側から参加された島亨氏は編集者として人文学のさまざまな出版編集に関わり、その編集的参与を通じなが

ら思考を進め、造形の現象学的思考を追求している研究者である。『秩父幻想行』『遠野物語』補注、日本の考古遺跡をはじめ、たびたび靳先生と中国の考古・民俗調査をおこない、縄文研究・中国先史研究などの論文がある。

五十嵐芳子氏は日本女子大学国文学部国文科で国文学を研究され、編集者として活躍しながら、日中芸術・文化交流のコーディネーターを勤める。「世界」をこの手で切り取る生活技芸《中国民間剪紙芸術》講演・展示・パフォーマンス実行委員会コーディネーターである。

中国民間芸術と美術考古研究をつなぐ靳教授の研究を、日本に紹介する架け橋となる方々をお招きして、初めての今回のシンポジウムは真に交流を記すものとなった。

シンポジウム会場には「剪紙」のオリジナル作品が、島氏・五十嵐氏の尽力で展示され、討論中もワークショップで制作中もこれらを参照し、じかに「剪紙」表現のクオリティーを感得しつつ、進めることができたことは、このシンポジウムの重要な成果のひとつとなった。

### 3. 「剪紙」芸術と日中の装飾芸術

このシンポジウムの意義は、民間芸術や装飾芸術の再評価を目的とするばかりか、中国という大文明から生まれた芸術全体の史的再検証のきっかけを、「剪紙」芸術という中国で最もポピュラーな民間の芸術の「思考」から創造することである。従来は中国美術・工芸といえば宮廷や支配層の生み出したもののみを対象としてきた歴史観を、「剪紙（せんし）芸術」は鮮やかに相対化する「民間芸術」の発見の代表的な領域として注目され、いっそう中国の文化伝統として学界・民間双方から再生させられていくことに寄与したいと考えた。この芸術の特徴は、人間ひとりひとりの「手」によって伝統の「紙」に、紀元前にさかのぼる伝統「文様」を造形しているところにあり、職業化した芸術とは異なる次元で伝統となった表現であることが重要である。

そしてそのモチーフである「文様」への注目は新たな扉を開いたと考えられる。本報告書で詳述されるが、中国では「文様」は、長い歴史のなかでいわば「不変」そして「普遍」の「生活の装飾」として、家庭ごとに、共同体ごとに、伝承されてきたもので、「生命の樹木」や「赤子・童子」や「村の生」など民俗と神話を担ったシンボルが、表されてきた。そうしたモチーフには、いっぽうの日本文化において「縄文」から、社寺建築の装飾、そして京都の「祇園祭」を飾る種々の工芸の装飾の「文様」や「意匠」と響きあい、「吉祥」や「豊饒」の意味を担った「神話的シンボリズム」を、大陸と島で共有した軌跡をしめしていることが再確認できたのである。

今回の日中シンポジウム開催は、本学COEプロジェクト活動のみならず、広くアトリサーチセンターの諸活動が学生・研究者・一般への芸術の歴史と現在を刻々に発信する役割を担う拠点において、現在の「日中関係」の模索のなかに、芸術文化の分野からの真の交流が求められていることへの応答としても、きわめて重要な機会を与えた。

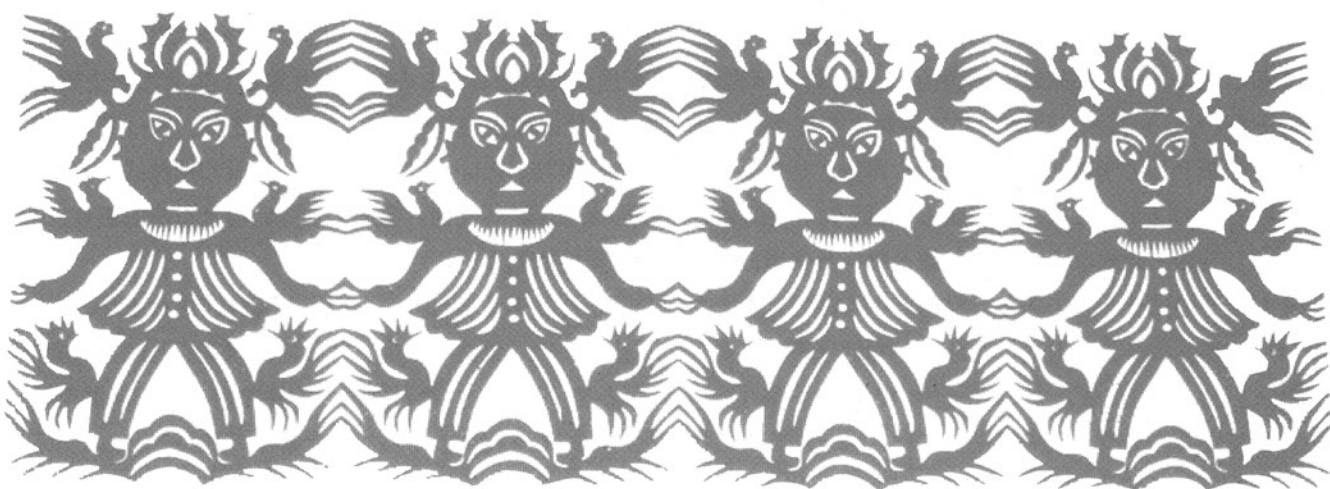
そしてそれはそのまま「日中」の関係の問題のみならず、人間の「手」と「身体」の可能性を問う「人間と芸術」の普遍的な探求のおおきな契機を、日本側から提言する機会となった。中国の古代文明と日本の文化は、きわめて繊細に対象を身近に引き寄せる「手」とその延長からなる文化を開発してきた。「手」の延長からなる文化は、フォークロアに現れるような「言語」表現の文化とあわさって、さらに「イメージ」「形象」の多様な文化を形づくってきた。「手」の文化には「絵画」「デザイン」や「造形」など現在の言語文化以外のあらゆる形象文化がふくまれ関わってきたが、最も単純な「手の文化」のうちには、「手」の働きが創り出す形象表出・異化作用の原型的なすがたがよく読み取れたのである。その例としてたとえば有名なケルト装飾文様の一つの原点に「組紐」の文化があるが、「組紐」「結び」の文化は、日本でも発達し、宗教や祭礼の装飾となって日本文化に特色のある形象を発展させていることが確認できた。

今回の連続講演とシンポジウムと同会場での展示では、中国から「民間剪紙芸術」の第一人者である靳之林氏と、剪紙作者をお招きしたことによって、こうした日本の装飾・文様研究にも触れていただき、「剪紙」という「手の芸術文化」が中国の基層文化とかかわるのみならず、そうした装飾芸術が、日本の伝統である繊細な工芸の装飾芸術とどのように連動し、装飾空間と形象（アイコン・载体）を生み出してきたのか、その表現のゆたかな生成・展開

のすがたを制作実演とともに語っていただけた。このような工芸・芸術・文化が私たちの生活のなかの生き生きとした媒体としての役割の大切さを認識するという目的が達成できたと考えるものである。

このシンポジウムに聴衆として、ともにハサミをもち「剪纸」を制作してくださった本学学生の皆さんと一般の皆さん、中国人留学生の皆さん、そのなかで通訳を引き受けてくださった大学院生の于坤さん、そしてこのシンポジウムの実現に尽力くださった立命館大学COEプロジェクト拠点リーダー川嶋将生教授をはじめ、COEおよびアートリサーチセンター関係のスタッフの皆さまに、この場を借りて篤く御礼を申し上げます。

また、来日された靳先生一行の滞在中の世話のみならず、貴重な「剪纸」のオリジナルの展示のためのさまざまな苦勞を担ってくださった、パネラーの島氏・五十嵐氏に心より御礼を申し上げる次第です。



「拉手娃娃」、祁秀梅作、甘肅省鎮原県

